



社会問題を考える

司教 高見 三明

『大辞林』(三省堂)によると、社会問題とは「広く社会の欠陥・不合理・矛盾から生ずる諸問題」とあり、多岐にわたっています。ここでは、ごく一般的にいのちの視点から考えてみたいと思います。

わたしたち人間にとって、いのちは尊いものです。しかし、そのいのちを滅ぼし、それに危害を加える人間が後を絶ちません。この事実は聖書全体の証言と合っています。

ところで、真のいのちは、互いに相手を尊重しつつ自らを与え合うことにあります。なぜなら、わたしたちは、自らを互いに完全に与え合いながら交わっておられる唯一の神、御父と御子と聖霊に「かたどりに似せて」造られ

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

たからです。従って、わたしたちは、まず神と交わり神に従属する者として、神と不可分の関係にあるのです。「善悪の知識の木」から食べてはならないという命令は、人のいのちが神への従順にかかっているということを示しています(創世記2・17)。人は、神のようにいのちを支配し完全に自立しようとするとき神との関係を絶つ(死ぬ)ことになり、神を神として認めることによつて神との関係を正しく保つとき、真に生きると言えるのです。

また人は、互いに深く信頼し合う者として造られました。最初の男女(社会が「裸であったが、恥ずかしがりはしなかつた」ということは、互いに相手の弱みにつけ込んで支配することはなかった、ということ)です。神は、人

を祝福して、地を従わせ生き物をすべて支配せよと言われました(創世記1・28)が、人を支配せよとは決して言われませんでした。もっとも、人間が自分以外の被造物と共生する責任を与えられていること、また世界の富が本来すべての人のために与えられていることも忘れてはなりません。

このいのちといのちの本来あるべき正しい関係、すなわち「義(正義)」は、神と民との契約によつて固められました。神の義は、愛によつて愛のために人を造りまた救う神として、まずご自分に絶対に忠実であられることにある、神の義に基づく人間の義は、このような神を喜んで信じ、その意志に自分の意志を合わせることにあります。しかし、神を神として認めず、神に従わないとき、神に逆らうだけでなく、他者を信用せず、その尊厳を傷つけ、殺すことさえするのです。

結局、さまざまな社会問題の根源は、神や他者よりも自分自身を優先させるという、人間が傲慢であること、あるいは神と全く自己中心的なもう一人の自分とのほさまにあつて、内面で分裂していることにあります(現代世界憲章10)。現実には、不正を暴力によつてではなく、正当な方法で矯正

したり排除したり罰したりすることも必要です(詩編9・9)。

確かに神は不当に抑圧される人を護り、不正な人を罰します(申命記24・14〜18、エレミヤ5・28〜29、詩編10・17〜18、82・3〜4)。しかし、その最終目的は、人をいやし、立ち直らせ、解放し、救うことであつて、抑圧者を糾弾し、断罪することではありません。それは旧約の預言者(アモス5・14〜15)や詩編作者(詩編76・10、113・7〜8、146・6〜9参照)、とくにキリストの態度(ルカ5・32、19・1〜10)に見られます。

ところで、平和は、真の義があるところに生まれます。平和は、キリストが自分のいのちを与えることによつてもたらした義の実りです(エフエソ2・14〜18)。この平和は、義に基づき愛によつて生かされたものにはかなりません。愛は自らを惜しみなく与え、相手を生かすことしかしらないからです。しかも、義も平和も愛も神の賜物ですから、それを祈り求めつつ、その働きにあずかる必要があります。お互いにいのちに対する深い尊敬の念とキリストの愛に貫かれた心で義を守る努力をし(アモス5・24、ミカ6・8)、同時にそのような心を互いにたゆまず培う必要があります。

みが両者を完全に一つのものとされたお方であることを認め、祈りながらそのあいまいさに耐えることが最良の手法だと思います。

そこから、全体のバランスがとれた役割分担が生まれてくるのではないのでしょうか。

Q. 社会の不正を福音のメッセージに照らして正していくということになると、福音の理解度や個々の問題への習熟度が問題となってきました。日本の教会はそういうことを含めて、個々の問題への取り組みを組織的に整理しているのでしょうか。

A. ある問題については日本の教会が全員一致して、ある問題は一部の運動体で、ある問題は個人のレベルで、というように、キチンとした指令のもとに整理されているわけではないようです。そのうえ、言われるように、一致できるもの、できないものなど、複雑にからんでくることも事実です。そういうところから生まれてきた組織が、「正義と平和協議会」だとも言うわれています。司教団の公式な組織に入っているが、その活動のあり方から見ると全面的に属してはいないようにも見える、という組織体のような感じです。まさに、

世に属しているが同時に属していない、という絶妙の間を保っている組織とも言えるでしょう。

Q. 保守派、革進派という分け方をすると、カトリックは中道ということになるのでしょうか。

A. 言葉の純粋な意味で中道と言つてよいと思います。仏教でもそうですが、中道という意味は、進歩派と保守派の妥協点で折り合いをつけようという中間派ではありません。ほんとうの真ん中という意味です。社会の苦悩と悲しみは、おもに人間が生み出すものです。その人間の苦しみと悲しみの真ん中に入り、その苦悩と悲しみをつき抜けて、そこに現存するキリストに至る道です。

リジュの聖テレジアは、十七才のときから二十四才で亡くなるまでのあいだ修道院の真ん中で生活し、社会に出ることはありませんでした。しかし、彼女の祈りは社会とともにあり、人間の苦しみと悲しみの真ん中にありました。だから彼女は、宣教の保護の聖人なのです。

中道とは、すべてのものの真ん中に入ることです。そして、そこにおられるキリストと出会うという道筋のことです。

Q. この秋「正義と平和協議会」主催の全国集会在長崎で開かれるということですが、それは長崎教区にとってよいことなのでしょうか。

A. 平和運動に関してですが、よく祈りの長崎、活動の広島、ということが言われたりします。同じようなことが、長崎の教会と都会を中心とする教会との間でも言われることがあります。

冒頭で述べたように、祈りと活動は一つであるわけですから、この二つが分かれていくはずはないのですが、どちらかということ、言われるような傾向が見られることも事実です。

そういう意味で、この秋の集会在わたしたちの目をより広く社会に向けさせるきっかけになってくれれば、わたしたちの祈りもより深められることと思います。そんな願いを込めて、大司教様はこの大会を長崎に誘致されたとも伝え聞いています。

最後に、「現代世界憲章」の冒頭のことをばと一緒に味わってみたいと思います。

「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。」

① 生活の場(家、職場)で一緒に集まります

信者たちが集まれる所であればどこでもよいのですが、基礎共同体の集いをするのに一番便利な所は信者の家庭です。平日は地理的に近い所の信者が集まり、お互いに信仰を分かち合い、困っている隣人の世話をします。愛を実践しやすいからです。また、家庭は生活の現場であると同時に神を体験する現場ですから、家庭を集まりの場とするのが良いのです。

しかし、社会、文化、経済的な変化で、男女の区別なく仕事をできるようになり、多くの時間を職場で過ごす今日の状況では、家庭で集まりを持つのも困難です。そういう場合は、職場に近い場所とかミサの後に教会で行う、というような工夫が必要です。

② みことばの分かち合いをします

みことばを通して近寄ってこられる主の現存を感じ、復活して自分たちのすぐ近くにおられるキリストご自身から力を得なければなりません。私たちが、みことばを中心に集まるとき、生きてお

られるキリストと出会い、信仰生活が深められ、刷新され、他の人たちの福音化にも寄与することができるのです。

③ 活動をしなす

私たちの信仰が強められるだけではなく、キリストが自分の中で生きて活動しておられることを証しできるようにならなければなりません。すなわち信仰と生活の一致が必要ですが、それには活動が不可欠です。

イエス・キリストが、孤独で困っている隣人に直接近寄り、やさしく撫でてくださったように、それぞれの基礎共同体も、その地域で自分たちの助けを必要としている人を探し、奉仕できるようにならなければなりません。

④ 教会と一致しています

基礎共同体は、キリストにつながれたブドウの木ですから、所属教会と一致していなければなりません。

これらの四つ要素の中の一つでも欠ければ、次のような姿となり、もはや基礎共同体とは言えなく

なるのです。

a. 活動だけを行いみことばの分かち合いをしないなら……

ある教会では、信者たちを地区や班に分けて、その中で話し合い、いろいろの任務を分担し合いながら、共同体として活動しています。しかし、その集まりではみことばの分かち合いをしていないので、それは信仰の共同体であるとはいいがたく、普通の親睦団体の性格を帯びやすくなります。

b. 活動がないなら……

ある教会の地区集会では、活動のことは話し合われなくて、みことばの分かち合いや親しい交わりをするだけにとどまっています。このような集まりは「聖書研究会」とか「信心会」とは呼ぶことができて、基礎共同体の集まりとは呼ぶことはできません。

c. 話し合っただけの信者の集まりなら……

ある教会では、地域が小さな地区や班に分かれてはいますが、一般的な行政的な機能が強く、その集まりの内容は、教会からの連絡

とか、募金活動や行事の打ち合わせなどにとどまっています。このように行政的な性格を帯びているなら、その地区や班は自分たちの問題を自ら見て判断する、実践していく全人的な信仰共同体にまでは達することができません。

d. 教会と一致していないなら……

ある教会のいくつかの地区は、いろいろな困難があるとか、自分たちの思うようには行かないなどという理由で、所属教会の意向とは違う方向に進んだりして、よく問題を起こします。そういう集まりは、もはやカトリック教会の共同体とは呼べなくなります。

今回は、第二番目の要素である「みことば(福音)の分かち合い」について、もう少し考えてみたいと思います。



医療技術の進歩の結果、三徴候方式はすべての場合に適用できず、別の基準でなければ生死を判定できない場合もあるのではないかと、という疑問が生じてきた。

都会の大きな病院で、自発呼吸はなく、検査をしても脳の活動の反応もないが、人工呼吸装置につながれ心臓だけは自発的に鼓動している、という状態の患者が多数見られるようになってきた。このような生命体の生死については、三徴候方式では判断できないのではないかと、という疑問である。これに対し、医学的には、このような場合、脳死がすでに起こっていることを確かめることによって「個体死」を結論できる、という説が出てきた。これがいわゆる「脳死説」である。

もしこの説が正しいとすれば、このような生命体の「脳死」が確認されたら、その生命体は死んでいるのだから、点滴や人工呼吸器で生かし続けることは、安らかに死ぬ権利を奪い、人間の尊厳を傷つける行為になるうえ、国の貴重な医療資源を無駄に使うことにもなるので、生かす努力を直ぐ止めるべきだ、ということになる。脳以外の生きている臓器を抽出

すれば臓器移植に使える、ということにもなる。

一口に脳死といってもいろいろな種類があり、それゆえ、死の判定基準として脳死を立てる「脳死説」もさまざまだが、最も有力なのは、「脳幹部分を含む脳全体の器質死」が起こっていれば「個体死」が起こっていると考えてよい、とする「全脳器質死説」である。

信仰の立場とも矛盾しない 「全脳器質死説」

そこで、教会にとつての問題は、この「全脳器質死説」が、教会の信仰・道徳の教えと矛盾しないか、また正しい哲学的根拠をもっているか、ということである。

この説には特別に問題はなく、したがって受け入れてもよい、というのが現代神学の判断である。カトリック哲学にしたがえば、もし「脳幹部分を含む脳全体」が臓器として死んでいるなら、すなわち「脳全体の器質」の死が起こっているのであれば、人間個体の統一性は完全不可逆的に失われている、と思われるので、霊魂の肉体からの分離である「個体死」

はすでに起こっている、と考えられる。三徴候基準で死と判断された者も、時間的に多少のずれはありえても、確実に全脳死の状態になる。

伝統的な「三徴候による死の判定」に代え、あるいはこれと併用して、「脳全体の器質死による個体死の判定」をすることには、カトリックの信仰の立場からは原理上の特別の異論はないわけである。

現行のわが国の「臓器移植法」でも、脳死は脳全体の死を意味するとされており、カトリックの信仰から見ると、特に反対する理由は見あたらない。この法律の定めた脳死の判定法も、カトリックの立場から見ると、特に問題はないと思われる。

「死の判定」は誤りうる

だが、「死の判定」は、三徴候方式による場合でも、全脳死の確定による場合でも、「霊魂の肉体からの分離」すなわち「個体死」を直接的に認識するわけではない。まず、ある臓器（心臓、肺臓、脳幹、大脳皮質など）の生物学的本質的機能の不可逆的停止を諸

現象を通して感覚的に確認し、それを基にそれらの臓器の生物学的「器質死」を結論し、そしてさらにそれを基にして「個体死」を推論するに過ぎない。

人間の行うことである以上、これらの過程における誤謬の可能性は、完全には排除されていない。

「脳死」判定を受け入れるか どうかは 各人の自由

結局、カトリックの信仰・道徳の立場からは、信者は誰でも脳死を「死の判定基準」として受け入れてもよく、受け入れなくともよい、というのが結論になる。各人が自由に決めてよいわけである。幸い、わが国の「臓器移植法」も、脳死による「死の判定」方式を採用する一方、「心臓死方式に従ってわたしの死を判定して欲しい」と言う権利を国民に認めているから、教会の態度とも調和していることになる。



「魂の継承」



「親子の断絶とか言うけど、僕の家は、僕と親の年がみんなより離れているが、うまくいっている。それは、僕が親を尊敬しているからだろう。親父だって、時代遅れのフンドシをしてみっともないが、僕はそれでも構わない。大人になったら、僕の嫁さんの話でも男同士で語りたい。」(6/8・ユタカ)

親子の断絶は永遠の課題である。親には、魂を込めてわが子に伝えたいものがある。人として何を大切に生きるかということである。それは、正義や健康や家族愛であったり、はたまた、先祖から受け継いできた技術や信仰であるかもしれない。しかし、多くの親が自分の魂をうまく伝えきれていないのが実情だろう。それは、伝えたいことが親自身の生き様でなければならないからに他ならない。

戦後 30 年も過ぎた夏、学級の親たちから「戦中戦後体験記」を募集した。親たちは昼間の労働に疲れた体に鞭打って、夜遅くまで握り慣れない鉛筆を走らせてくれた。それは親たちの青春の記録であり、また、親がわが子に何かを伝える絶好の機会でもあった。

そんな中、50 代半ばを過ぎた一人の父親は被爆体験記を寄せてくれた。自身は飽の浦の工場で被爆し、川口町の自宅にいた 2 歳の息子と妻は、懸命の看護も空しく、数日のうちに次々と亡くなっていった。戦後しばらくしてから再婚した二度目の妻も、数年の後、原爆症で亡くなったという。そして、三度目の妻との間に生まれた一人息子がユタカであった。体験記には、原爆のために次々と命を奪われていく妻たちや幼ない息子の様子が、愛しさを込めた調子で記され、読む者に何かを訴えている感じさえ与えた。それが何であるかを、担任はその時は読み取れないまま時間が過ぎていった。

「親父は入院している。今までで一番病状が悪い。見舞いに行った時、満足にしゃべれず目もうつろだった。親父は僕の手を取って何かを言おうとしたが、声にはならなかった。でも、僕は親父が何を言いたいのかわかった。『入試の前の大事な時に、すまん』と言いたかったのだ。一か月前から母は付き添いで、僕は一人で飯を食べ、勉強した。近所のおばさんたちも、時々、ぼくを励ましてくれた。今年は親子で生活したのは 15 日ぐらいだ。親はとても大切なものだ。時には時代遅れや間違いもするが、そんな親を許してあげよう。我々の先は長い。先の短い者をいたわろう。」(3/15)

卒業式の二日前、この「班ノート」を読んだ時、冒頭の 6 月の文章を思い出した。そして父親の体験記の内容もよみがえってきた。父親は、自分がいかに家族を愛して生きてきたか、今いるユタカやユタカの母親だけでなく、原爆で赴いた妻たちや幼い息子も同じように愛してきたと、体験記を通してユタカに伝えたかったにちがいない。

卒業式の午後、担任が見舞いに行くと、ユタカは病院の父親のベッドで父親と並んで寝ていた。卓上には卒業証書とアルバムが置かれ、母親は二人の様子目を細めて眺めていた。そこだけが病棟とは隔絶された別の世界のように思われた。

その父親も、ユタカの嫁さんの話をユタカと語ることなく、翌年の冬に赴ってしまった。それでも、それまでの父親の生き様を見てきたユタカの魂には父親の魂が確実に受け継がれ、今でもユタカの中で脈々と生き続けていると担任は信じている。

(にしむら よしを)



生涯養成委員会

人間は神の似姿として創造されました。人が罪を犯してその姿をとどめなくなってしまうても、神は人間をあわれみ、おん独り子ご自身が人間となつて、わたしたちが再び神の似姿となれる道を開いてくださいました。

キリストはわたしたちとともに生活し、神により似た者になりながら永遠に生き続ける至福への道を示してくださいました。わたしたちの人生は、キリストが示してくださいださる天の国への道を一步一步たどり続ける旅にほかなりません。その一日一日が恵みのときであり、学びのときなのです。キリスト者の生涯は、聖霊に導かれながらキリストとともに歩む、学びの日々です。長崎教区では、その生涯を大きく二つに分け、前半の高校生時代までの学習については信仰教育委員会が、その後の神の国への旅立ちのときまでの学習については生涯養成委員会が担当することになっていきます。ただし、高校時代と青年時代の諸課題への対応については、青少年委員会の担当となります。

この生涯養成委員会は、かつての要理教育研究所が担当していた活動の大半を引き継ぎました。信仰養成講座や聖書講座、またその修了者たちに

よつて組織され、このたび名称を変更して新たな組織として誕生した「みことば友の会」活動なども、同委員会が担当・支援することになっていきます。

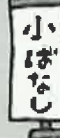
同委員会が今後新たに開始したいと考えている活動のひとつに、「基礎共同体リーダー養成講座（仮称）」があります。この基礎共同体活動というのは、十年ほど前からアジア司教協議会連盟がさかんに推奨しているもので、現在アジアのさまざまな国で大いに実績をあげつつあると言われている活動です。

すでに教区内の若手の神父様方や信徒使徒職関係者のみなさんが何度か韓国を訪問し、いくつかの小教区での活動内容を見学させていただいていますが、長崎教区を活性化させるための手段としてこれを活用できそうだと、との感触を抱いておられるようです。

この活動を長崎教区にも取り入れ、地区集会などいし班集会の中で活用できるようにするにはどうすればよいかを、現在は宣教委や信徒使徒職関係者とともに模索している段階です。その成果を少しずつ本紙で紹介していく予定ですが、整った形のを皆様に公表できる日が一日も早くやってくるようお祈りください。



「水平線」



役員

「諸君、よろこびへ！」

このたびの重要会議によると、長崎教区の宣教体制づくりは着々と進んでいるということであつたぞ」

信徒

「それはどのくらい進んでいるのでしょうか」

役員

「そつだな。ついにあるべき姿が水平線上に現れたと言つておつたな」

信徒

「水平線って、どんな線のことですか」

役員

「そつだな。はっきり見えてはいるが、決して近づいてくることがない線のことだな」

信徒

「……」



ゆき